

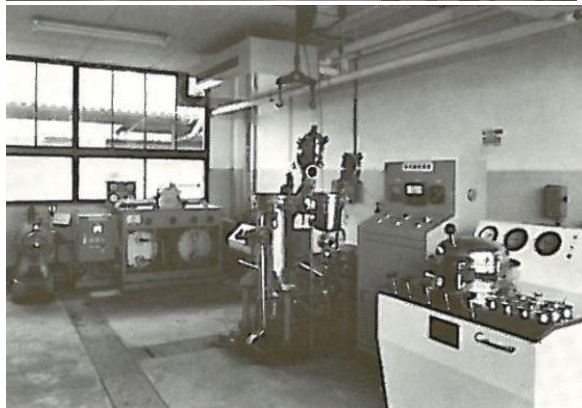
タオル製造のほぼすべての工程において、タオルの生産者が頼りにしたのは染織試験場だったんです

染織試験場のおもな役割のひとつが、染色加工業者やタオルメーカー、捺染加工業者などの依頼による技術支援、依頼試験、開放試験である。たとえば、染色（晒染）・捺染工程では糊付方法・染色や捺染の方法についての技術支援、製織工程では糸の密度の調整やデザインに合わせた製織方法の相談や技術支援、デザインでは新しい製品の企画に関する相談といった具合である。

中小規模の製造業者が分業体制のもとでタオルを生産する今治地域では、タオルの製造工程の多くの部分において染織試験場を頼りにしており、とりわけ染織試験場は研究開発部門のような役割を果たしていた（染織試験場の略年譜および主活動については「タオルびと」2014年12号〔高橋俊明氏①号〕を参照）。



恒温恒湿



開放試験室（染色）

（愛媛県染織試験場パンフレットより転載）

それゆえに、相当な作業量をこなしていた染織試験場であったが、スタッフの数は意外にも少なかった。芥川記氏の記憶によれば、1956～1957年頃（昭和31～32年頃）は染色部門4人、製織部門4人、デザイン部門3人の技術者がいた。それ以降も試験場では、10数名のスタッフで幅広い業務をカバーした。

染色部門にいた芥川氏は、越智源(株)や大和染工(株)をはじめとする染色加工業者と排水処理の問題で結構な頻度でコミュニケーションをとっていた。芥川氏が各工場に足を運ぶ場合もあれば、工場の経営者や技術者が染織試験場に相談や実験などに訪れる場合もあった。

染織試験場での多忙な毎日を過ごすなかで、1963年、芥川氏が31歳のときに今治出身の久美子さんとの見合い結婚をし、所帯をもった。2男1女にも恵まれ、家族の大黒柱としてますます仕事に精が出た。染織試験場の染色技師として1953年に着任して以来、高度成長期、そして安定成長期における今治タオル工業の発展を地道に陰ながら支えてきた。その成果から1985年に染織試験場の場長に抜擢され、1991年の退職まで組織の舵取りを任された。時代はちょうど日本がバブル経済に沸いていたときである。

バブル期においても、染織試験場の機能は基本的には変わらず、準備・製織・仕上の各工程に従事する製造業者を技術開発・改良、製品・デザイン開発、人材育成などで支援した。しかし1980年代前半頃から、産地における染織試験場の立場に微妙な変化が起こっていた。表2でみるように、1980年代前半以降利用者が少しずつ減少している。この背景に、とりわけ製品の企画やデザイン面でタオルメーカーが染織試験場の支援から離れていったことが挙げられる。

産地内外の間屋と取引をしているタオルメーカーは、ブランド名入れタオルの流行によって間屋が提案する製品の企画やデザインを商品としてつくりあげることが仕事になっていった。つまり、かつて自社デザインを考案していたタオルメーカーも、間屋が持ち込む

ライセンス物を生産するようになり、みずから製品を企画したりデザインしたりしなくなったのである。自社デザイン・自社ブランドにこだわり続けたタオルメーカーもあるが、今治では例外的な存在となった。

芥川氏が染織試験場で活躍した時代は、今治タオルの発展期にあり、戦後から1991年までタオル生産量はほぼ右肩上がりをつづけた。とくに、好況を背景に1970年代からブームになったブランドタオルの生産やタオルメーカーの間屋依存型体質の形成などによって、中小のタオル工場が研究開発部門として染織試験場しか頼る所のなかった時代からそうでない時代へ移行していったからであろう。

芥川氏が染織試験場を退職した翌年から、今治タオルの真の意味での生き残りをかけた競争と挑戦がはじまり、現在、染織試験場の後身である愛媛県産業技術研究所繊維産業技術センターの産地における役割がふたたび重要な意味をもつようになっている。

表2 染織試験場のサービス利用状況

項目	1964	1966	1968	1970	1972	1974	1975	1977	1979	1981	1983	1985
自発研究	—	141	226	216	220	258	251					
依頼試験加工	2,689	1,243	1,450	2,249	3,847	2,994	1,448	2,546	1,673	1,309	940	1,260
技術指導	1,870	2,077	1,797	2,254	1,851	1,875	1,507	1,661	1,322	1,170	964	812
技術相談	322	1,162	1,201	669	520	398	451	554	346	185	408	411
実地指導	448	287	288	383	548	307	280	151	126	152	82	24
開放試験室	—	—	860	1,862	981	828	353	286	229	250	190	206
簡易巡回技術指導	—	—	—	—	—	—	—	36	45	45	46	45
公害防止巡回指導	—	—	—	—	—	—	—	14	22	22	16	10
一般巡回技術指導	—	—	—	—	—	—	—	—	12	3	5	4
エネルギー巡回技術指導	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5	10	10
技術アドバイザー	—	—	—	—	—	—	—	—	—	28	33	33
計	5,329	4,910	5,822	7,633	7,967	6,660	4,039	5,248	3,775	3,169	2,694	2,864
技術者養成	88	68	83	89	73	46	10	9	70	42	43	24
研究・講習会	—	13	23	—	—	—	11	39	28	16	19	13
一般団体見学者	—	6,161	6,059	—	—	—	332	382	798	658	639	429
来場者	6,760	1,736	2,676	4,766	3,853	2,767	2,357	2,434	2,173	1,862	1,727	1,334

注：1964年度について、図表中の項目にはないが「加工調整」526名、「実地試験」807名の利用者がいる。

出典：愛媛県染織試験場「染織ニュース」No. 26（1964年5月）～No. 158（1986年5月）より作成。

退職後の新たな船出

染織試験場を定年退職後、芥川氏は、1992年に吉井タオルが設立した Y グループ協同組合に再就職した。Y グループ協同組合は、タオルの準備工程である晒し染め加工をおこなう吉井タオルのグループ会社であり、芥川氏は染織試験場でのキャリアを買われて入社した。

仕事に対する職人気質は、ここでも発揮された。入社後は一日の作業内容と仕事での感想をノートに記し、当時吉井タオルの社長だった吉井久氏に提出していた（吉井久氏については「タオルびと」2013年12月号～2014年3月号を参照）。吉井タオルでは染色加工の内部化はもちろん新たな挑戦であったため、染織試験場で晒し染め技術のいろはを熟知していた芥川氏に大きな期待を寄せていた。こうして、芥川氏は40年間勤めた染織試験場を退職後、Y グループの技術的基盤の構築に尽力した。

3. 「染織試ニュース」と染織試験場

先ほど触れた「染織試ニュース」は、1962年4月に染織試験場によって産地のタオル製造業者のための雑誌として発刊された定期刊行物である。1962年4月（第1号）から1970年6月（第97号）まで毎月1回、同年8月（第98号）から1974年4月（第120号）までは2ヶ月に1回、1974年7月（第121号）から1976年4月（第128号）までは3ヶ月に1回、1976年8月（129号）から1981年8月（144号）までは4ヶ月ごと、1982年1月（145号）から1988年9月（164号）までは不定期に発刊された。

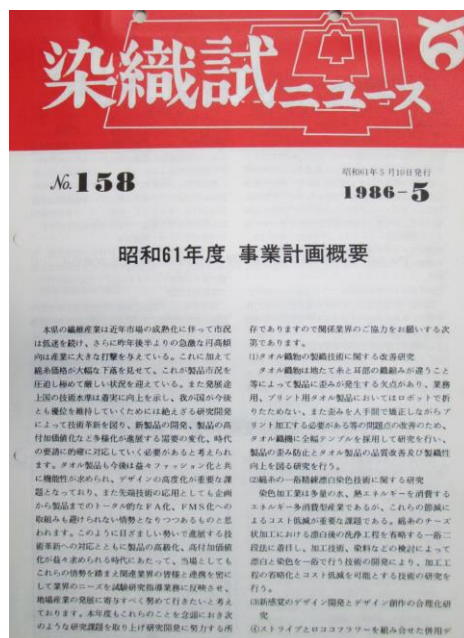
「染織試ニュース」はタオル生産者のための専門雑誌であったため、その内容は染晒・製織・デザインの各部門における専門的な情

報が各号において掲載された。染色部門に限って、1960年代、1970年代、1980年代の年代別にその特徴を表3から拾ってみよう。まず、掲載内容は年代を問わず、①晒し染め方法および試験、②機械関連、③揚水・排水に関するものがほとんどである。

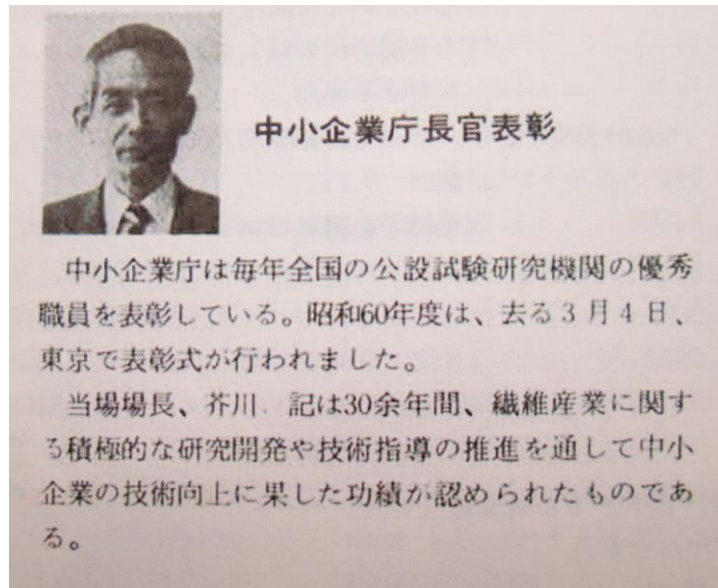
つぎに年代別にみると、1960年代は主として総染晒加工とチーズ染晒加工が主流であるが、1966年にビーム染晒サイジング加工が登場する。染料に関しては反応染料が1964年に「染織試ニュース」に掲載され、芥川氏が述べていたように昭和40年代頃から反応染料が普及していったことが看取できる。また、染晒工程の機械化もこの時期におこなわれ、情報掲載量はこの時期がもっとも多い。

1970年代になると、染晒加工はチーズとビームに移行し、タオル織機の大型化を反映している。1960年代と比べて顕著に違う点は、染色による揚水・排水の問題について頻繁にとり上げられていることだ。タオル原系の染色による「水」の問題が重要事項として浮上している。

1980年代になると、発行頻度も減少するが、各号の情報量は一段と少なくなる。そのなかで特記すべきは、先晒タオルを主力としてきた今治タオルだが、仕上加工工程として捺染による製品の開発が紙幅をとるようになってきたことである。染晒加工も従来の準備工程のみならず仕上工程における染色・捺染技術が求められるようになっていった。



「染織試ニュース」第158号の表紙



芥川氏は優秀職員として中小企業庁から表彰を受けた

（「染織試ニュース」第158号より抜粋）

表3 「染織試ニュース」に掲載された
染色（晒染）加工に関する主な内容

項目	1960年代	1970年代	1980年代
染色（晒染）方法・試験	連続糖練漂白技術（亜硫酸ソーダ法）の研究指導	タオル原系チーズ糊付試験	先晒タオルのビーム方式による染色糊付技術の研究指導
	綿糸糊付法について	耐光堅牢染色見本	低ターベン染染糊による新しい染染技術研究
	綿糸漂白法について	反応性染料染染の乾熱固着法による洗濯堅牢度試験	タオル振染、防染技術の研究
	糖練漂白糊付について	チーズ糊付について	チーズタオル系の糊付技術の開発研究
	原系チーズ状染糊付乾燥に関する基礎研究・応用研究	川崎・上野式サイザー糊付加工について	タオル染染の応用による新製品開発研究
	水質がナフトール染色法に及ぼす影響について	フィキサソール染料の概要	タオル染染の高敏化と高周波利用による省エネ技術に関する研究
	合成糊併用による綿糸糊付試験	蛍光染料チーズサイザー染色	綿糸のチーズ状アルカリ処理技術の研究
	反応性染料によるタオルプリントの研究	プロシオンH-E染料について	タオル染染における特異技術の開発
	冷染型染料の染染方法	分散型硫化染料による綿糸染色	綿糸のチーズ状アルカリ処理技術の研究
	コーンスターチの糊利用試験	反応染料染色試験	
	チーズ加工用糊液の粘度試験	タオル用原系チーズ低溶比漂白試験	
	甘糖粉糊付試験	タオル織物による顔料染染の研究	
	インスタント糊の糊付試験	タオル織物の顔料染染摩擦堅牢度向上試験について	
	反応性染料洗濯堅牢度試験	先晒タオル原系加工吸水性の試験	
	ビーム染色技術について	反応性染料の染染における合成材料の適用性試験について	
	綿糸の糊付とその油耐効果	先晒タオル糊液連続整理加工技術に関する研究	

	プロシオン染料について	タオル系ビーム染色加工技術研究	
	新しい反応性プロシオンスプラ染料の線染について	漂泊・廻付の経緯処理の研究	
	次亜鉛素酸ソーダ併用H2O2漂泊法について	チーズ染色加工処理の研究	
	無蒸熱タオル板染法		
	ナフトール染料による群糸染色試験		
	タオル用懸系廻付（ユニゲル）添加剤使用について		
	反応性染料のフィックス剤効果試験について		
	界面活性剤の精練漂泊効果試験について		
	ジェットサイザービーム廻付について		
	ミカシオン染料濯濯堅牢度向上法について		
機械	高湿高圧染色機、噴射式染色機など染織過程の機械化の普及と指導		
	マイヤー型ナフトール染色機の完成について		
	標準染色装置の紹介		
	チーズ染色設備完成		
	染色物摩擦堅牢度試験機紹介		
	高圧高湿染色染色装置紹介		
揚水・排水	精練・漂泊・染織に不可欠な河川工業用水の水質試験、染色工業揚水と排水処理について	染色排水処理について	公害防止巡回技術指導
		染色排水凝集剤クリベスト、浮上装置ハイフローターについて	
		染色廃液処理研究経過について	
		染色廃液処理並びに染料回収再利用の研究	
		水質汚濁防止法の実施について	
		タオル染色加工業の公害防止巡回技術指導結果について	
その他		染色加工費上げ	
		染色休業で市長が仲裁に入り平常稼働へ	

資料：「染織試ニュース」1962年4月（第1号）～1988年9月（第164号）より作成。

産地にタオル製造業者が増加するにつれて、なるべく多くの関係者へ情報発信するために1964年4月から「染織試ニュース」を発行し、そのほかにも『タオル工学』（愛媛県染織試験場、1968年）などのテキストも出版し、染織試験場は情報提供の面でも積極的な活動をおこなっていた。

（次号につづく）

